

## 令和4年度終業式 校長式辞

令和5年3月24日（金）

山内 悟

皆さん、おはようございます。

今日は、久しぶりに、体育館での終業式を行うことにしました。2年生・1年生の皆さんは、本校に入学してから、集合型での全校集会というのは経験がないと思います。学校にとっても、本当に久しぶりです。

これまで実施してきたオンライン型の集会にもよい点はありますが、今日は、集合型ならではの良さを皆さんとともに共有できればと思っています。

さて、3月1日に、高志中学校3期生を含む高校3年生241名の先輩たちが、本校を卒業していきました。卒業式には高校2年生・1年生の皆さんにも参加してもらい、一緒に卒業生を送り出してもらいたいと願っていましたが、今年もそれは叶いませんでした。今後、社会全体でのコロナ禍への対応が緩やかになっていくことが見込まれていますので、来年度の卒業式は全校生徒が参加する中で実施できればと思っています。

卒業式では、私の式辞、在校生代表の内田さんの送辞、そして卒業生代表の清川藍さんによる答辞などが読まれました。これらは本校のホームページに載っていますが、皆さんはもう読んでくれたでしょうか。

答辞を読んだ清川さんは、高志高校での生活を「5兎も6兎も追った3年間だった」と振り返りました。医学部への進学を目指して学習に励んだこと、E S S部に入り英語ディベートに挑戦したこと、課題研究や学校外の活動に励んだことなどを例に挙げて、「失敗で終わらせず次に活かすことを繰り返せば、いつかは結果に表れると信じた」「いろいろとチャレンジを続けたことでどの世界にも上がいることを知り、毎日ワクワクした」など、前向きな気持ちで、楽しみながら、物事に取り組んだことを述べてくれました。

その一方で、特に3年生になってから、それまでやってきたことを続けることに疑問を感じたり周囲の友人たちと自分を比べたりして、焦燥感を感じるなど、精神的に苦しむ時期もあったようです。

皆さんも、高志高校でのあと1年あるいは2年間の高校生活の中で、プラスの気落ちでいられるときもあれば、マイナスの状態に陥ってしまうときもあると思います。焦りや不安、挫折や絶望はできれば避けたいところかもしれませんが、だからといって、皆さんには「挑戦しない」という選択はしないでほしい。

自分にできる範囲のことだけをやって、「できた」という結果があればよしとする生き方。

今の自分にはちょっと難しいかもしれないこと、成功するかどうかわからないことにトライしてみる。仮に失敗しても、そこから次の取組のヒントを探ろうとする生き方。

皆さんには、後者を選んでもらいたいと、私は思っています。その方が、ワクワクした毎日を送ることができるのに加えて、満足感や充実感、より高い自己評価につながる可能性が高まると思うからです。

ここに、『未来の科学者たちへ』という本を持ってきました。大隅良典先生と永田和宏先生という、ともに著名な科学者お二人による著書です。この本の中で、永田先生は次のように述べておられます。

「研究では、どんなに優秀な研究者であっても、必ず行き詰まりというものを経験する。行き詰まったときに、どのようにその状況を打開して、袋小路から抜け出せるかは、複眼的な世界の見方を常に維持していること以外に方法がないのである。」

失敗したり、行き詰まったりするのは、新たなチャレンジにはつきものと考えましょう。そのこと自体を悔やんだり嘆いたりするのではなく、その状態を改善・解決することに力を注ぐようにしましょう。そして、そのプロセスの中で、自分が成長したり変化したりするのを楽しむようにしましょう。

永田先生が言われる「複眼的な世界の見方」を獲得するには、数多くの試行錯誤、すなわち、失敗とそれを乗り越えようとする努力・工夫を重ねる以外にないのではないのでしょうか。そういう意味で、皆さんには、失敗することを勧めます。意図的に失敗する必要はありませんが、「失敗することがいけないこと」と思うのではなく、「失敗した今がチャンス」と考えるようにしましょう。そうすることで、何らかの展望が開けてくるのではないかと思います。

ちなみに、もうお一人の著者である大隅良典先生は、2016年のノーベル生理学・医学賞を受賞された方です。3月11日に行われた「ふくいサイエンスフェスタ」でご講演をいただきました。

この本に興味がある人はぜひ手に取って、大隅先生、永田先生からのメッセージを感じ取ってください。

あわせて、本校ホームページにある清川さんの答辞や内田さんの送辞にも目を通して、これまでの自分の高校生活を振り返るとともに、今後の高校生活をどのように過ごすかをイメージするきっかけにしてもらいたいと思います。

4月から、新しい学年が始まります。この春休みに、皆さんが心と体のリフレッシュをして、新しい学年を迎えてくれることを期待します。